

特異な「遊び」

——『それから』における代助の行動原理とその限界——

岩 下 弘 史

1 特殊「高等遊民」代助

『それから』はこれまで実に多様な読まれ方をしてきた。しかし、代助が作中で「遊民」と呼ばれ、その行動原理に「遊民」と呼ばれるだけの何かがあったことに關してはあまり力点を置いて論じてこられなかったように思う。彼は果してどのような「遊民」であり、それが彼にどのような影響を与えたであろうか。

「遊民」という言葉との関連で、漱石が有名にした言葉の一つとして、「高等遊民」というものがあげられるであろう。もっともこの「高等遊民」は漱石の造語ではないようだ。先行研究によれば、『それから』が書かれてから二、三年後の社会問題の一つに「高等遊民問題」なるものがあつたという。高等教育を受けても、適当な働き場所がなく、遊民として暮らしている人々が自然現象として多くなり、社会問題として

新聞、雑誌等で喧伝されたのがその実態である。

しかし、本論文では漱石の造語であるか否かということや、漱石がこの語を用いた社会的意義について論じたいわけではない。漱石の用いた「高等遊民」はそのテクスト内においてそれなりの存在感を占めていることは疑いようがないが、彼らは、そこで、どのような存在として在ったのであろうか、ということを考察し、代助とどう關係しているかについてまづは見ていきたい。

「高等遊民」という言葉は『それから』よりも後に書かれた『彼岸過迄』に現れる。そこに登場する松本はこう述べる。

「田口が好んで人に会ふのは何故と云つて御覧。田口は世の中に求める所のある人だからです。つまり僕の様な高等遊民でないからです。いくら他の感情を害したつて、困りやしないといふ余裕がないからです」²

さらに、「御家族は大勢」いるか、奥さんがいるか、「貴方の様な方が、普通の人間と同じ様に、家庭的に暮して行く事が出来るか」という疑問を持つ敬太郎に対して、松本は「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」と答えている。ここから、漱石の用いる「高等遊民」の一つの内実が明らかになる。「高等遊民」は世の中に求める所のないもの、すなわち、世の中から完全に自立した存在であり、地位や名譽や職業、財産を求めない、いわゆる社会とのしがらみなどを超越した、それでいて、家庭的な、家という場（制度ではない）を重視する存在が想定されているようである。その存在の条件としては、働かずとも生きていけるだけの財産、親の遺産や、仕送りなどの経済的条件が整っていることが必須のものとしてある。松本は働きたくても働けないわけではなく、「贅沢に遊んでいられる」身分なのである。そして、その趣味は多様であり、「茶の湯、骨董、寄席、芝居、相撲」を樂しむ一方、「社会観とか人生観といふ小六づかしい方面の問題」を持ち出し、敬太郎に「此松本といふ男は世に著われない学者の一人なのではなからうか」とまでいわれている。「高等遊民」は趣味の人であり、かつ、高等教育を受けた敬太郎に学者と思わせるほどの知性を持って文明批評を行う人物でもある。

では、代助はどうであろうか。まずその父との会話を見てみたい。

「それは実業が厭なら厭で好い。何も金を儲ける丈が日本³の爲になるとも限るまいから。金は取らんでも構はない。金のために兎や角云ふとなると、御前も心持がわるからう。金は今迄通り己が補助して遣る。おれも、もう何時死ぬか分らないし、死にや金を持つて行く訳にも行かないし。月々御前の生計位どうでもしてやる。だから奮発して何か為るが好い。国民の義務としてするが好い。もう三十だらう」

「左様です」

「三十になつて遊民としてのらくらしているのは、如何にも不体裁だな³」

これを受けた代助は「遊民」と言われたことは否定しないが「決してのらくらしているとは思」つておらず、「ただ職業のために汚されない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へている」ということが、語り手により明らかにされる。

代助は父から、お前がやっていることは素晴らしいが、それでは金にならんから金を儲けることができる何かをしろ、

と言われているわけではない。つまり父からは、代助は何かを成しているというより、単にのらくらしている「遊民」にすぎない、とみなされているのである。「遊民」という言葉はのらくらと何もしないものだ、という父の認識が明らかになる。対して代助は自らを単なる「遊民」ではなく、内容の

多い時間を有する「上等人種」の「遊民」だと考えている。そのことは代助と門野の關係に明らかである。門野は代助を評して「いいつもりだなあ。僕も、あんな風に一日本を読んだり、音楽を聞きに行つたりして暮っていたいな」と述べる一方、代助は門野を「学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろごろしている」と評し、自分と門野が同じカテゴリーの「遊民」だとは捉えていないようである。それならば代助が「高等遊民」で、門野は単なる「遊民」であるのだろうか。後者については代助の父の言うような「のらくら」した存在に思われるので、当てはまるであろうが、前者は先ほどの「高等遊民」の定義からすれば否である。代助は本もよく読むし音楽も絵画も嗜む、その他の娯楽にも精通している。また、様々な文明批評めいたことも作中で行っている。しかし、彼には先ほどの「高等遊民」松本とは異なる点がある。家庭すらも否定する、ということだ。代助は実家から離れて一人暮らしをしているし、結婚のすすめにもことごとく反対し、独身を貫く。それは徹底しており、女中に関しても平岡に

「君の家から誰か連れて来れば好のに」と言われても、「とにかく家の奴は好くないよ」と答えるほどである。「高等遊民」はおそらく、ここまで徹底的に家庭を含めた社会性を拒否することはないであろう。

先ほど引用した父との会話に関して、「親爺が斯んな事を言うたびに、実は気の毒になる。親爺の幼稚な頭脳には、かく有意義に月日を利用しつゝある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹きだしてゐるのが全く映らない」という代助の心中が明かされるが、ここに、すでに多くの論者が述べているような、そしてこの論文で言う、松本などとは異なる、特殊な「高等遊民」代助の特徴が表れている。父がどのように考えているかについて、実際にコミュニケーションをとることなく独断的に決めつけるのである。例えば、石原千秋はこの特徴を「全ての他者性（差異の体系）の拒否」として定義し、それが故に代助は自己実現の場を失い、社会的価値がゼロになった、と結論づけている。一般的な「高等遊民」は家庭に属する限り「全ての他者性」を失うことはない。このような他者性あるいは社会性といったものを排そうとした特殊「高等遊民」代助についてさらなる考察を進める。

2 特異な「遊び」の構造

さて、代助は特殊な「高等遊民」ではあるが、あくまで

「遊民」である。では、彼はどのような「遊民」なのであるうか。

「遊民」は遊ぶ。しかし、こうして単に「遊ぶ」といってもそれは様々な意味を持つだろう。例えばホイジンガは『ホモ・ルーデンス』のなかで「遊びは（略）「ありきたりの生活」とは「違うものである」という⁵」ものだ、と前提する。また、カイヨワは『遊びと人間』の中で、「遊びは本質的に生活の他の部分から分離され、注意深く絶縁された活動。」である、としている。まずここで想定されている「ありきたりの生活」とは何であろうか。平均的な人間は何らかの社会に属し、そこでの与えられた役割をこなす。大抵の人々は家で祖母、祖父、母、父としての役割を果たしたり、学校に通ったり、あるいは何らかの仕事を行うなどして必然的に何らかの社会性を背負っているが、それこそがいわゆる「ありきたりの生活」であろう。そして、ここから意図的に逃れようとしているのが代助である。

遊びはホイジンガやカイヨワが言うように、「ありきたりの生活」を離れて行われるものであるが、そもそも代助にとってこのような「ありきたりの生活」は逃れるべきものなのである。彼は「生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験（引用者注直前で言及されているニコライの復活祭を楽しむんだ経験を指す）の方が、人生において有意義なもの」だと

している。「ありきたりの生活」に必要な経験より「復活祭の経験」が重要なのだ。彼はこれを信念に日常生活を送っている。代助は自身の具体的な日常生活から離れて遊ぶのではなく、想定、自分が行ってもいい「ありきたりの生活」を離れて日常生活そのものを遊ぶのである。

さらに、代助の日常生活との関わりで、カイヨワの示す「遊び」の、より具体的な定義を見てみたい。

(一) 自由な活動。すなわち、遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう。

(二) 隔離された活動。すなわち、あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること。

(三) 未確定の活動。すなわち、ゲーム展開が決定されたり、先に結果が分かっていたりしてはならない。創意の必要があるのだから、ある種の自由がかならず遊戯者の側に残されてはならない。

(四) 非生産的活動。すなわち、財産も富もいかなる種類の新要素も作り出さないこと。

遊戯者間での所有権の移動をのぞいて、勝負開始時と同じ状態に帰着する。

(五) 規則のある活動。すなわち、約束ごとに従う活動。こ

の約束ごととは通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する。

(六) 虚構の活動。すなわち、日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明日に非現実であるという特殊な意識を伴っていること。⁷

(一) (四)などはまさに、代助の日常生活にあてはまるものであろう。⁸彼は「自由に」活動し、「隔離され」、「未確定で非生産的な活動」を行っている。代助は日常生活そのものを「遊び」として行っていたのである。これに対し、恐らく一般的な「高等遊民」はある程度まで家庭的である以上、「自由さ」や、「隔離されている」ということが不十分である。また、代助の日常生活は前述したような彼独自の信念に基づいて厳密に送られたので、(五)にも妥当している、といえるであろう。「遊民」門野はこのように自らの生活を律していたようには思われない。

このように代助の「遊び」は想像上の「ありきたりの生活」を離れ、日常生活そのものを遊ぼうとした、という点で特異な構造をもっているといえるであろう。これらをふまえたうえで具体的に代助の分析を行う。

3 道徳観・身体観

ここまで述べてきたように、代助は「ありきたりの生活」を拒否し、その日常生活を「遊び」のようなものとして捉えていた。後に見るように彼は「ゝのために」行動することを否定し、あたかも自らはそれから全く逃れられるかのように思い、自らの生を自らの力のみでコントロールできるものとして対象化しようとしていたのである。⁹それに関して代助の平岡との関係の変化を見る。

代助は今の平岡に対して、隔離の感よりもむしろ嫌悪の念を催ふした。さうして向うにも自己同様の念が萌してゐると判じた。昔しの代助も、時々わが胸のうちに、斯う云ふ影を認めて驚いた事があつた。其時は非常に悲しかった。今はその悲しみも殆ど薄く剥がれて仕舞つた。だから自分で黒い影を凝と見詰めて見る。そうして、これが真だと思ふ。己を得ないと思ふ。たゞそれ丈になつた。¹¹

平岡や三千代と交流していた時分の代助は特殊「高等遊民」としては描かれていない。平岡に対して「流俗の諺に降参して、好加減な事」を言うような青年であつた。そのため引用にあるように、当時の代助は平岡に対して嫌悪の念を感じたことに悲しみを覚える。しかし、今の代助はそのことをもは

や悲しがることはなく、単にこれが真なのだ、と客観的に受け止めるだけである。日常生活を対象化しているため、自己とその間に距離が出来ていることが見て取れる。例えば柄谷行人は代助の自らの無為の弁明に関して「社会的・外圧的なもので、彼の内部から遊離しているように感じられる。」¹²としているが、これは代助が自らの生を「ありきたりの生活」から逃れたものとして対象化しているからだといえるであろう。これに関連して代助の道徳観を見てみたい。

代助は凡ての道徳の出立点は社会的事実より外にない¹³と信じてゐた。始めから頭の中に硬張った道徳を据ゑ付けて、其道徳から逆に社会的事実を發展させ様とする程、本末を誤った話はないと信じてゐた。従つて日本の学校でやる、講釈の倫理教育は、無意義なものだと考へた。彼等は学校で昔し風の道徳を教授してゐる。それだけでなく一般欧州人に適切な道徳を呑み込ましてゐる。この生活慾に襲はれた不幸な国民から見れば、迂遠の空談に過ぎない。(略)代助に至つては、学校のみならず、現に自分の父から、尤も嚴格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭の中に起した。代助はそれを恨めしく思つてゐる位であつた。

この箇所以外にも散見されるが、父と代助の道徳観の違いは明らかである。父は確固たる不動の道徳の存在を信じている。一方、代助は、道徳は絶対的なものではなく、常に社会的事実から出発するものだと考えているのである。これは生活を対象化して捉えることとかかわりを持つ。自らの生に意識的になり、後述するように自らの本能を優先しようとするため、社会的事実との調整の役割こそが道徳であると捉えているのだ。父と代助のこの対立はたとえばローティが指摘するような「真理とは発見されるものだ」という考えと「真理とは作られるもの」¹⁵である、という考えの対立とも読み替えられるであろう。

さらに続けて、今度はその身体観を見てみたい。代助は非常に自らの身体に意識的である。この『それから』という作品は代助が心臓の上に手を載せ、血の音を確かめながら眠に就く描写から始まる。彼は、「血潮の緩く流れる様」を「これが命である」とし、その「掌に伝える、時計に似た響きは、自分を死に誘う警鐘のようなものである」と考え、「この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら」「如何に自分は絶対に生を味わい得るだろう」と想像するし、「歯並びの好いのを常に嬉しく思つて」いて、皮膚にも髭にも満足している、「肉体に誘を置く人」である。これもまた、彼が自己の生を

対象化し、全てを自らの範囲におさめようとしていたことと関係を持つ。彼は自らの身体にも意識的なのである。

しかし、ここで一つの問題点が考えられる。代助は今まきに見たように身体に意識的であるがその対象化の際に問題は生じる。身体というのは対象であると同時に、対象化する自己自身でもあるのだ。以下の引用を見ていただきたい。

湯のなかに、静かに浸つてゐた代助は、何の気なしに右の手を左の胸の上へ持つて行つたが、どんどんと云ふ命の音を二三度聞くや否や、忽ちウエーバーを思ひ出して、すぐ流しへ下りた。そうして、其所に胡坐をかいた儘、茫然と、自分の足を見詰めてゐた。すると其足が変になり始めた。どうも自分の胸から生えてゐるんでなくて、自分とは全く無関係のものが、其所に無作法に横はつてゐるように思はれて来た。さうなると、今迄は気が付かなかつたが、実に見るに堪えない程醜いものである。毛が不揃に延びて、青い筋が所々に蔓つて、如何にも不思議な動物である。¹⁶

自らの身体がこのように意識的にはつきりと対象化されると、奇妙な自分のものではないように感じられる。これは身体がそもそも他の事象と同様に単純に対象として捉えることが

できないからであろう。

そして、このような問題は、そもそも身体に意識的となる原因である、日常生活の対象化、ということとも関わつてくる。代助は「ありきたりの生活」を拒否し、その日常生活を对象化する。しかし、すでに示唆しているように、代助は、実際には「ありきたりの生活」から完全に逃れることはできない。少なくとも彼は父親や兄、嫂の援助なしでは生きていけないし、そもそも人間として生まれた以上、よほど特殊な環境下にはない限り、完全に他者性を排してある種の超越者として振舞うことはできないであろう。「ありきたりの生活」を排して日常生活を对象化する代助は「ありきたりの生活」を完全に離れられない以上、日常生活を他の事象のように簡単に对象化することなどできないのである。このような無理が代助を襲う「アンニユイ」の一つの原因となる。

代助は言葉にできない倦怠感を感じたときに、「アンニユイ」という語を持ち出す。ここで、最も詳細にそれについて語られている箇所を見てみたい。代助は「アンニユイ」を感じると、「自己は何の為に此世の中に生れて来たかを考へる」という。そしてその都度、「人間は在る目的を以て生れたもの」ではなく、「生れた人間に、始めてある目的が出来て来る」という結論に達する。それは前者が「人間の自由な活動」を奪うものであるからだ。「方便の具」に「自己全体の活動」

を使用するならば「自己存在の目的」を破壊したも同然である。その「根本義から出立」した代助は、「自己本来の活動を、自己本来の目的としていた」のである。「歩きたいから、歩く。すると歩くのが目的になる。」という。しかし、そこで彼は再び「アンニユイ」に罹ると、「自らその行動の意義を中途で疑うようになり、話は振り出しに戻る。

この反復の原因である「アンニユイ」とはなぜ生じるのであろうか。代助は「ゝのため」を否定し、自らの欲求に忠実になろうとする。日常生活を、完全に自らで統御しようとするのだ。「自己本来の活動を自己本来の目的」としようとするとはそういうことだ。

彼はこのように「自己本来の活動」すなわち彼の欲望を「自己本来の目的」としようとするが、問題となるのは「自己本来の活動」すなわち代助の欲望である。人間の欲望とは食欲、睡眠などの動物的欲求などを除けば、ジラールの欲望の三角形な形を持ち出すまでもなく、そもそも何らかの他者性を含むといえるであろう。それにも関わらず「アンニユイ」が生じるときの代助の想定している欲求は動物的欲求に類するものだけに思われる。「ゝのため」を否定すればそこに残るものは自己の本能に関わる欲求だけである。そして、そのような動物的な欲求が「自己本来の目的」となることに落ち着けるわけもない。こうして「アンニユイ」が生

じるのである。代助は他者性を切り離し、「ありきたちの生活」を拒否するが、そこに残るのは動物的欲求だけである。しかも実際には彼は、父親や兄、嫂の援助なしでは生きていけない以上、「ありきたちの生活」から完全に逃れることもできないのである。日常生活を完全に対象化することの限界がここに見えるであろう。

彼は「ありきたちの生活」Ⅱ「ゝのための生活」を、実際は自らもそこに組み込まれているのに、意識の上だけのものとして捉え、そこから離れて自らの日常生活を対象化し、遊ぶ。しかし、そのような日常生活は意識の上で始まったものである以上、実際は意識の上での遊びにしかなり得なかった。彼の日常生活が彼の意識を離れられないものとして描かれているのはそのためである。この小説では代助の自身に対する心理描写のみが徹底して行われており、小谷野敦が指摘するように、「三千代の内面を語らないのみならず、代助が思い描いた三千代の内面すら描こうとしていない」¹⁸のである。

4 『それから』のそれから

ここまで見て来たように、他者性を排し日常そのものを遊ぶびとして対象化しようとしていた特殊「高等遊民」代助には限界があった。また、父親に援助を打ち切られ、兄や嫂にも見捨てられた場合その成立条件を失う、という問題もある。

遺産で暮らしていた『彼岸過迄』の須永とは異なるのである。果してその危機は訪れる。それを迎え代助に変化は起こるであらうか。結末部分を見てみたい。

彼の頭は電車の速力を以て回転し出した。回転するに従つて火のように焔つて来た。

これで半日乗り続けたら焼き尽す事が出来るだろうと思つた。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くるくると回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、また代助の頭に飛び込んで、くるくると渦を捲いた。

(略)

仕舞には世の中が真赤になった。さうして、代助の頭を中心としてくるりくるりと焔の息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した。

カイヨワは先ほどあげた『遊びと人間』のなかで遊びをアゴン(スポーツなど)、アレア(賭けなど)、ミミクリ(物まねなど)、イリンクス(メリー・ゴー・ラウンドなど)の四

つに分類し、歴史を見たときに、まず、ミミクリ・イリンクスが遊びとして在り、そこからアゴン・アレアの状況に進化すると論じる。代助の日常生活の遊びはアゴンあるいはアレアに近いものであつたが、この最後の部分の代助の生はもはやイリンクスである。そして、ここで多用される「赤」は情熱や三千代を暗示させるものとして本文を通して登場して来た。この部分は三千代と関わつた代助の今後を暗示するものとなつているといえるだろう。彼の日常生活Ⅱ遊びはもはや完全に形態を変えたものになつてゐる。代助がこのまま単純に、『それから』の続編とされる『門』の宗助のようになつて行くとは考えられないであらう。

注

1 熊坂敦子「高等遊民」の意味」『国文学』三三三号、伊豆利彦「夏目漱石『彼岸過迄』の「高等遊民」」『横浜市立大学論叢人文科学系列』四一号、西崎美登利「高等遊民」であること——『彼岸過迄』論——『成城国文学』一八号を参照した。

2 「彼岸過迄」『漱石全集』第七卷、岩波書店、一九九四年、一六一—一六四頁。以下漱石作品の引用は全てこの全集による。

3 「それから」、前掲、三三三—三三九頁。

4 石原千秋「反Ⅱ家族小説としてのそれから」『漱石作品論集成第

- 六卷 それから、一九九一年、一九五頁。
- 5 ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』里見元一郎訳、河出書房新社、一九七一年、五七頁。
- 6 ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』多田道太郎、塚崎幹夫訳、講談社学術文庫、一九九〇年、三五頁。
- 7 前掲、四〇頁。
- 8 もちろん厳密に言えば多少のずれは生じるであろうが、それは「遊び」一般にも言えることである。
- 9 カイヨワ自身、(五)と(六)は相反するものだと認めているため、(七)も妥当する必要がある。
- 10 これは前述した遊びの定義(五)とかかわるものでもある。
- 11 「それから」、前掲、一四〇頁。
- 12 柄谷行人『増補 漱石論集成』、平凡社、二〇〇一年、四三四頁。
- 13 「それから」、前掲、一四三―一四四頁。
- 14 たとえば父については以下のように語られている。
- たゞ応へるのは、自分の青年時代と、代助の現今とを混同して、両方共大した変りはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔し世に処した時の心掛けでもつて代助も遣らなくつては、嘘だといふ論理になる。(「それから」、前掲、三四頁。)
- 15 リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯―リベラル・ユートピアの可能性―』齋藤純一、山岡龍一、大川正彦訳、岩波書店、二〇〇〇年。
- 16 「それから」、前掲、一〇八頁。
- 17 前掲、一七六一―七七頁。
- 18 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む』、中公新書、一九九五年、一―三頁。
- 19 「それから」、前掲、三四三頁。